

アナキストは、どんな社会革命をめぐすのか

—— 大沢論文をめぐって ——

(1)

「原水爆死か社会革命か」というスローガンにしろられた大沢論文は、その結論へ持って行くまでの手続きの中には、明解な状勢分析などがある、我々が平和共存や平和五原則などの線にそって動いている限り、現存する絶望状態からぬけ出す道がない事を、手に取るように示している点において、立派なものだが、欠点が一つ二つある。

それは、我々が平和の問題を真に追求して行けば、いやでもおうでも現存する、国家の廃棄の問題にぶつかるからである。処が、大沢君はあの論文の中で一言もこの対決の問題にふれていない。彼はただ「社会革命」とだけいつているに過ぎない。

勿論、彼を知り、彼の諸論文を読んでいる者にとっては、その「社会革命」が、国家の否定を意味している事がわかるからひとまずそれでいいが、今までの彼の諸論文を知らず、又、

一寸、物を考えて見る性質の読者の場合だったらどうだろう。その人は単に社会革命といっただけでは困ると思うに違いない。というのは社会革命をやった筈のロシアが原水爆を盛んに造っているからである。つまり社会主義国家と原水爆とは無縁ではないからである。

だから大沢君は、社会革命ならどんな社会革命をやっても平和になる、と云うテーゼとは訣別して、「それは国家を否定する無政府主義社会革命でなければならぬ」とハッキリ規定せねばならなかった筈である。

ところが、そうすると当然、ここに困ったことが起って来る。それはバクーニンのペシズムが持つ憂うつや、クロボトキンのアンヴィバランス(文明の価値の矛盾した二重性)から引き出された荘嚴な衆観の問題はしばらくおくとしても、我々は国家否定をランダウエルやブウバアーの方法によってやるか、大沢君が本誌で前に論じたように、政治的には分権主義者であるアナキストは、分権主義的権力を徹底的に肯定しなければならぬという方法でやるか、どうかである。それは吾々無政府主義者の間でも決定していないし、まだ論争のテーマにすらなっていないことである。

勿論これは困難な袋小路ではない。抜道はある。即ち、革命はアナキストがやるのではなくて民衆がやるのだから、前述の方法の可否や選択とは関係なく、ひたすら民衆の意志と、本来民衆の中にある無政府主義的傾向を助長するために、革命の捨て石として働くと言ふ筋である。

この筋へ足を入れた時、大沢君の深いふくみのある論文の欠点は救われる。同時に彼の革命的ソフト・フォカシズムも生誕するわけであるが、まだ完全とは云えない。というのはあの論文を読んでみても、かかる革命的ソフト・フォカシズムがすでに日本の労働者の中には存在していて、まだ充分に独自にはその表現を見出ししていなかったのを、彼らにわたって大沢君が示した、と思える材料も証拠もないからである。もしあれば、夢に現実を与え、思想に表現を与えた功績は、彼に帰するであろうが、どうも彼は、客観的な歴史、必然的な認識を主体である労働者におっかぶせているような気がする。

その点、大沢君は全学連の執行部によく似ているようだ。それでも学生の場合には、執行部の狂激な指令とは関係なく、かなり自発的に、必要な場合には温健な学生ですら、所定の行動位置についているのが現状であるが、一般労働者の場合には、組合の指令によってやむ無くと云うのが実際の姿ではないだろうか。

かく見ると、大沢君の前述のスローガンを、堂々と正面切って押し出して、日本の民衆から浮き上る必配なしと云う断定を、もう少し深く検討して見る必要に、我々はどうしてもせまられる。殊にこの点を、日本の労働者とその家族とを中心にして、少しくわしく見て見なければならぬと思う。

(2)

しかし、本題に入る前に、何故に、このような革命的ソフト・フォカシズムを彼が出したかという心理的背景(思想的背景についてはすでに素描した)について、蛇足をしておく必要もありそうだ。

その出発点はどうだ。まず第一に、彼ほど深く日本のアナキズム運動の発展を切望している者はまれだという我々の断定がある。この意味を別の言葉でいうと日本の我々の運動は負弱だということだ。これを解消するために「理想」七月号へ彼は「バクレーニンとマルクス」を発表した。その中で彼は「ボル達がバクレーニンに学び、アナ達がマルクスに学んで何が悪い」といつている。我々は後者の頭へ「聡明な目における」という形容句をつけたならば大賛成である。事実、我々はマルクスのフォエルバッハに関するテーゼなどは大切に胸で暖めているくらいだが、かんじんのマルクスが、感性として主体的に人間や物をとらえたことは生涯において数えるほどしかなかったことも知っている。例えば、晩年、ヴィラ・ザスリッチがロシアのミール制度について、彼の意見をたずねた手紙の返事の中で、すでにバクレーニンが高く評価していたこの共同と土地共有にもとづくロシアの原始農民社会が「社会組織の

強力な形態であり、資本主義の生産段階を通過せずに、直接、高度の社会形態に達することができる—と述べている点などは全く良い。我々はマルクスに学ぶどころか老マルクスが生きていたらキッスをしてやりたいくらいだ。

だから大沢君が、くだらないレーニンの説教などに金しばりになっている石地蔵のような奴でなしに、人間らしいマルキストと提携する必要から、前述のボカシ、スローガンを出したのではないかと想像してもいいようである。

なお以下のような事実にも、多少の心理的影響を受けたのではないだろうか。例えば、与えられた民主主義的自由であっても、その結果は、日本の各家庭の若き世代の間に、真に近い個人主義的自覚をよびました。父の権威の喪失をめぐる悲劇や新しい愛情の生誕のきざし、又、都会や農村における主婦達の自己享受や、自己発展のための自発的な小集団組織の発生（これなど戦前において夢想だもなし得ないことだ）。又、完全に無償なティーンエイジャーの殺人事件があるかと思うと、性交の自由を立て前とする男女大学生の創った合弁会社組織。又、HR運動の起源であるハウソン案の実験の結果、そのデータは労働者の不満と不能律の解毒剤として、少数労働者親和の自律的法則を示し、戦後、誠実なシモース・ウエイユの「工場労働者の条件に関する研究」によって完璧に裏書され、資本主義の集団主義的お祭り騒ぎの虚構と、マルクス唯物論に対する甚大な動揺を与えたこと。

尚、大戦時代、英国がドイツの空爆で危機に瀕した時、専門家、科学者、将軍、兵士、普

通の庶民に至る、レダーに関心を持った人達の作った一階級や地位を徹底的に廃除した—自由な防衛討論会組織が、イギリスの敗滅を救ったこと（これらの全く新しい人間関係設定の原理が、何処から来たかは未だ問われていない）などを挙げて見ることが出来る。勿論我々は砂川基地反対闘争や歌山動評反対闘争が、彼に少なからざる影響を与えたに違いないことを忘れてはならない。これらの闘争が、平和共存平和運動が持つのと質的には余り変らない防禦的抵抗運動であって、直接、社会革命とつながっていないことを知っている彼にとって、遂に我慢がならず、前述のスローガンを押し出したのだろう。だがどうも行動の要請というよりも、批判の要素が多いような気がする。（これは非難どころか、今後ますます我々は日本、ソ連、アメリカがやる政治、社会、経済の方策の究明を必要とする）が、批判から行動は生まれず、行動からのみ生まれるという事実からは、多少の非難を受けねばなるまい。

この非難は、こんどは行動の意味において、防禦的抵抗論者にも向けられる。彼らは、抵抗運動を全国民の運動にまで拡げて行けば、そこに質的な（革命的な）変化が起きると弁証法的に考えているらしい。（ここでは唯物弁証法のインチキ性をのべている暇はない）、行動を本質的な意味における運動その物に還元しても、その自動性など認め得ない。運動に特定の方向を与えるためには、どうしても存在論的な条件が必要である。

防禦的抵抗論者も大沢君も、この条件の問題を考慮していないようだ。大沢君にとって条

件とは、アメリカの重点主義的なミサイル生産や、ソ連の諸矛盾のことらしいが、我々が主張するのは、革命をやる民衆一殊に、ここでは日本の労働者とその家族の主體的な条件のことを意味する。

(3)

漸く本題へ近づいて来たが、我々は現在の日本の労働者又は労働運動が、あのスローガンを呑み、それを行動化する条件を持つていとは思わない。

例えば去年、V氏が連盟から出したパンフ（結論は立派な物）の中で、文化や生産設備の進歩した西欧に革命が起きず、資本主義的にも文化的にも、最もおくれたロシアや中国に強権主義革命が起った事を、強権主義に力点を付して述べた時、私は革命に力点をあげばこの逆が真実なのではあるまいかと書いた。即ち、ウド・コックの見解を採り、後者が文化設備も大企業も持たず、従って自然に接する機会にめぐまれ、自然が持つ簡素と粗野と大胆をより多く吸収し得たことが、革命の本質的要素となったのでないか、といったことがあった。

実際、自然から隔離され、生を迫害する無味乾燥な近代工場設備の中にいる労働者は、骨の髄まで疲れ切っている。酒、映画、キャンプリングは益々その疲れを助長し、彼らは手紙

一本書くことにすら、身を切られるような生理的苦痛を感じる。残されたものは泥のような眠りのみである。

なおさら悪いことには、日本の労働者とその家族が、自分達の労働組合を本質的には信じていないで、自分及び家族の全生活を支えてくれる者は、自分達を雇っている企業資本家であることを、腹の中では深く暗黙のうちにきめてしまっていることである。（組合はストをやつてクビになつても、新しい仕事の斡旋さえしてくれないのに、会社は結婚すれば結婚資金を、三十年勤めれば何十万という退職資金をくれるなど、この問題は重要なので後で詳論する）

このことは労働者の政治的関心という立場から見ても同じことである。もし日本の改良主義者達が、自分らの党を支持する膨大な数の労働者の票に、真に熱っぽい息がかかっていると考えているとすれば、それは彼らが政治とスポーツの歴史的関連を、すっかり忘れた結果である。かつて現在の庶民階級がスポーツに熱情をかたむけているほど、政治に熱情を捧げた時代もあった。近代ブルジョワ政治の発端が、一七八九年パリ・チュウレリーのテニス・コートで開かれた国民議会であることは、象徴的である。今や、この熱情の火はほとんど消えた。フランスでも日本でも労働者を含めて、庶民はギャンブル、スポーツにのみ血道を上げてゐる。従つて、改良主義者を支持する労働者の票のほとんどは、野心的な組合ボスの一方的な指令によるものであつて、なんら主体である労働者の意志も感情も通つていないこと、今さらくり返すまでもないことである。

かくの如く、いずれの方面から見ても、大沢君のスローガンや「労働者の解放は労働者それ自身の力によらなければならない」というテーゼが、日本の労働者とその家族に腹の底から実感として受け入れられる可能性は、絶無のように見える。が、彼らの息を真に吹きかえさせる予徴がないわけではない。

我々は最近、アンリイ・ダンフルヴィルという人の著書や大熊信行氏の婦人雑誌に書いた論文を読んで、いささか希望を持った。それらの著者達がのべる客観的な事実と、フルンチョフの、七年後に共産主義社会へ移行して見せるといふ豪語が、世界の資本主義産業機構に与える甚大なる変化によって、日本の低賃銀制度の基盤をなす、企業資本家の家族主義的温情主義がもはや固守不可能となるに従って、それに支えられていた労働者とその家族に及ぼす影響とを結び合わせた時、漸次、我々のいう条件は満たされて行くことを確信するに至った次第である。

ここで大熊氏の論文をまだ読んでいない人のために、簡単に紹介する。

ダンフルヴィル氏も大熊氏も共に、家族の古代史から初めている。先ずアリストテレスなども強調するが如く、古代においては、父の権力が絶対性を持ち、該当社会の最も強い支柱であったことをのべ、漸次、民主主義時代になるに従って、父権は国家に、全的な家庭内教育慣行は学校に、社会を支えていた家内産業は資本主義企業に、すっかり奪いさられ、家族に残された唯一のものは、子供を産み育てる機能だけになった事実をあげる。ここで大熊氏

は独自に、この最後の機能しか残されなかったにもかかわらず、ながく家庭は国家に奉仕して来たが、遂に、核時代に至るや、この家庭の子供を産み育てるといふ、人類にとって最も重要な本質的機能が、凡ての子供を殺し、胎児をすら奇異なる化物と化する国家の本質的機能と、真っ向うから対立するに至る、という意味をのべている。

この所論をエンゲルスの「家族、私有財産、国家」の中の家族とを比較して見る雅量のある読者は、大熊氏の所論の価値がハッキリするであろう。それでもなお、この所論は大沢君のスローガンと同じく、原理的にも展望的にも、全く正しいにもかかわらず、日本の労働者とその家族を具体的に取りあげた場合、直接的効果はむずかしく、従って、彼らに腹の底から納得されるまでには、多少の時間を要することはいなめないだろう。

ここに所論、客観的見解と、具体的見解との宿命的な相違が生ずるわけであるが、この問題は、次章の課題となるであろう。

(4)

前章で、我々は客観的なものと具体的なものととの宿命的なずれと云うような処へ、問題を運んで来たが、それは、我々が科学的客観性や確実性を重要視するあまり、客体を高め主体

をけなして、本来、科学的操作の中へは古くから入りこんだためしのない時間的要素―云わば目的論的なもの―殊に、目的論的な形成力の消極面における反作用を軽視することである。云うまでもなく、目的論的な原理の積極面は、宗教、芸術、その他の領域において、目覚むるばかりの創造作用を行つて来たことは誰でも知つてゐるが、しかし、有目的に構想された未来が、逆に現在へ反作用を起すことも、またされられない。そこでは、それは完全に現状の満足感と、結びつくに至る。現世利益を主眼とする新興宗教の殷盛などその適例だが、我々の場合においては―客観的には国家の廃棄をせまられてゐるが、主観の領域では、個々の一般民衆は、フロムが云うが如く、国家を「社会的感情」でおし包んでゐるという具体的事実を無視できない―そこにいわゆる生じて来てゐるのである。

勿論、具体は、何時でも特殊をその中に包含しているが故に、前章で我々が全学連所属の学生の自発性をほめ、組合ボスの指令で動く組織労働者の自発性の欠如を嘆いたが、特殊な学生の中には、かなりの知識や思想をとり入れながらも、同志石黒の云うように、始末におえない立身出世主義者もゐるし、又、反対に、九州杵島炭鉱争議をやつた労働者諸君のように、資本家連盟に対して「全体の組織のために凡ての力を、一人の労働者のために組織の凡てを」をスローガンとする組合運動の本質を実践にうつし、炭婦協まで生み出した目ざましい労働者の階級の自覚と連帯の尊い例もある。又、組合員の借金の世話にまで組合が乗り出して、労組賃金斗争だけのものとしてではなく、所属の労働者個々の日常生活と直結しよう

とするある炭労を例示することも出来るのである。(これら果敢な斗争と、連帯を最も緊密に直結実践した労働者諸君が、大都市の人達ではなく、自然に包まれた地帯の人達だと云うことに注意を向けられたい。我々はかつて「クロハタ」紙上で英国で最も革命的な労働者は、自然的環境―マルクスが捨象してかえり見なかつたもの―の中に生活してゐる炭鉱労働者であると云つたことがある)。

が、しかし我々は、かかる特殊な例から一般を推定し、日本の労働者が一般的な如何なるスローガンをも呑みうると断定することは、目的論的立場から云つても、その創造的側面のみを強調することになりはしないかと考える。間違つてもらつて困るのは、第一に、我々を目的論者だと定義づけてしまうことである。我々はただ唯物弁証法をインチキだと断定し、真の弁証法的過程の中へは、いやでもおうでも目的論的なものが這入らざるをえないと云う極めて具体的な立場から物を言つてゐるに過ぎない。第二には、前述のような消極面がある限り、革命は不能だとか、革命的スローガンを、特殊な民衆が呑みこみえないと言つてゐるのでは断じてなく、むしろ、特殊な労働者、学生、又は兵士などの勢力が、ある種の勢力とタイアップするならば、革命は必ずしも不可能ではなく、彼らのユートピアは実現可能であるのではないかと思ふ者であるが故に、現在、無暗に狂激なるスローガンをかかげたり、革命を不能にしてはならないのではないかと言ふのである。

このパラドキシカルなテーゼが一見奇怪に見えるからと言つて、我々は豚の愚昧を欲して

いるのではない。むしろ蛇の巧緻を望んでいるのだから、安物の炭のように、直ぐカットならないようにお願いしたい。

なお、このテーゼは我々のデッチ上げたものでも、新しいものでもなく、ロシア革命を身を持って体験したニコライ・ベルジャエフに始まり、誠実なフロムを経て、アナキストとしてスペイン革命に参加した天才的思想家であり、学生時代すでに赤いルイズ・ミシェルとあだ名されたシモーヌ・ウエーユに至っている思想であり、もし、諸君が社会思想史の頁をめくるならば、我々の偉大なる先駆者達の間にも、すで見出される思想でもある。

それは、バクーニンのベシズムの一形態としても捕えうるし、また例えば「いよいよとなれば、我々はバリに無数の味方を持つ」と豪語した不敵なブランキすらも、思想の「光明」の庶民的拡充なくしては、真の共産主義革命は不可能だと断言しているし、ブルードンもクロポトキンも、少し過程は違いがマルクスらも、その急務を説いていることは諸君のよく知る処である。

もし、我々がこれらの優れた先駆者達の希望や不安を無視して、その行動面のみを強調し、革命をおおりに、革命を強行するならば、それはハックスレーの「素晴らしい世界」でなければ、オウエルの「一九八四年」以外の何物でもない。一層直接的にはソ連的革命葬送曲の馬鹿げた演奏に終るのみであろう。

(5)

幸いにもアナキストやアナルコ・サンジカリスト達は、マルクスがブルジョワから直接そっくりそのまま継承した権力の国家集中や、生産力発展概念などと云う、コケおどしの代物をしょい込んではいない。

アナキスト達は、この二つの虐殺概念からかもし出される煉獄を、通らなければ、労働者は天国へ行けないと云う、マルクスの非情の深部に、彼の正義感がひそんでいたことも知っている。しかし、この非情が、愚昧な彼の弟子共の権力的妄執によって、最悪な地獄以下のものにまで転化したことも知っている。そして、これとからんで強化された滑稽な生産力発展概念は、今度の二十一回党大会における声明通りフルンチョフによっても、相も変わらず受けがれている。

彼は、ヘーリ報告など無視するが如く豪然とかまえているが、すでにアメリカ自体が生産力発展の最も重要な基礎である、自然資源の枯渇（石油、非鉄金属類、ウランなど）をば、未開発資源国の奴隷的労働力の搾取に依存しているのであるから、ソ連がアメリカに追い付き追い越す過程の中で、その豊富だといわれている自然資源（資本主義的に遅れていたため

に未開発部分存在)も枯渇になやむ時期が来ないとは、誰も云うことは出来なからう。例えばアメリカに二十年遅れていると証明すみの最近盛んになって来た合成石油化学工業(その多くは民需向き合成製品製造)が、ソ連民衆の要望もだし難く強化されはじめられるとすれば、すでに深部採油をよぎなくされているソ連の油田の命脈に、どのような影響を与えるであろうか。

かくて、アナキスト達はマルクスの生産力発展概念の永久性を否定する。大体生産力の増大とか減少とか、云うことそれ自体がごまかしである。それは、特権階級やそれに奉仕する経済学者と称する帮間共が、自己の位置や権力や、その学問の永続性を保持するために人間をマツスとしてつかみ、主体である個々の民衆の生活の真の完全な安定を、経済学という嘘パチな手品を口実として、永遠の未来にゆだねること以外のものではない。我々がポタ餅に手をのばすと、それに応じてポタ餅は永遠の未来へ遠ざかる夢をよく見るものだが、これこそ生産力発展概念の真の意味だ。

我々は、生産力は現段階において、すでに世界の民衆を養う充分な豊富さを持っていると断定している。現在において豊富の中の貧困があらわれるのは、分配の矛盾にあると断定するのである。

我々は、この点までは全く正しい認識の中にあるのである、だが、この分配の公正化に熱中するのあまり、それを妨げている私有財産の廃棄の結果が、ソ連では分配の公正化になんのか。それをアナキスト自身が自分に問いかけて見ない処に、その認識の欠陥がひそんでいるように見える。

例えば、自動車や運転手がブルジョワの所有であるのと、ソ連的に国家の所有であるうと、又は組合の所有する社会にならうと、所有の質には何んの変りばえも生じない。ただ形式上の差異があるのみである。この形式上の差異をもたらすためにのみ革命は沢山の血を流すのだろうか、そうではあるまい。自動車を主体である民衆の真の所有にするためだろう。真の所有にすると云うことは労働者であるその民衆が、その内燃機関の科学や、それに関連する科学を認識することが最初に来なければなるまい。

同じ意味においてシモーン・ウエイユは、若し労働者が自己の使用する機械の科学を真に認識していないならば、労働時間が如何に短くなっても、工場管理が如何にうまく出来ていても、又、工場の所有権が資本家、国家、或は組合(殊に組合官僚主義の盛んな日本やソ連において)とガン首は幾らすげ変っても、やはり本質的に労働者は機械奴隷に過ぎないと云う意味を述べている。

これは又、近世において誰よりも先きにバクーニンが洞察し希求し、そして深く憂えた問

題であった。彼は「科学があらゆる個人の現实的、面接的生活と一体をなすことを、同一個人の中における知識労働と肉体労働の致命的な分裂の廃止を、心の底から熱望していた」。そして、これが革命の結果えられるのではなくして、革命の第一前提でなければならぬと考えていたことは、彼の種々なる職権のアルチザンに対する深い支持的な言明からもうかがわれるのである。

我々はひそかに考えているのであるが、我々の先輩、水沼辰夫氏や同志萩原氏などが、思想の最も頑強な果敢な斗士であった理由の背景には、両氏が自己の仕事の科学を、最もよく認識していられたアルチザン又はクラフトマンであり、いよいよとなれば工場機構の革新を敢行し得る深い自信があったからではないかと思う次第である。

(6)

ところでここに問題になるのは、近代技術或いは労働の方向はこの重要なアルチザンを徹底的に廃除する進路をとっていると云う見解がある。その代表的なものは、前述のシモーヌ・ウエイユであるが、これに対して星野芳郎氏は「技術革新」において次のような見解をのべている。「アメリカの労働統計で、熟練工の数は一九二〇年には四四〇万人だが、三〇年

には不熟練工と同数六三〇万に達し、五〇年には八二〇万人と増加している。オートメーション化された現在では、不熟練労働のようなものは機械自体がやる傾向があるので、残った労働は科学的知識を必要とする熟練労働だということになり、全体として熟練工の比重が不熟練工の比重を圧倒した。もっと進んだ職場にある労働者達は、機械や装置の原理や機構について、あるいは工程そのものについて、総合的に理解することが要求されて来ている。したがって労働者は少なくとも日本の現在の高等学校程度の素養を身につけなければならぬなり、労働者と技術者との差が縮まりはじめている。」(傍点筆者)。

この星野氏の見解は、シモーヌ・ウエイユの「熟練労働者がただ一種の機械に奉仕する自動的に訓練された専門別の人足」であり、資本主義的抑圧組織の中で、最も重要性を持つ職能、即ち単に機械を与えられた総合的見地に従って「調整する」というだけの職能」に過ぎず、不可分な全一体をなす科学の理解などとは縁もゆかりもない「歯車の断片」たる職能に過ぎないと云うシモーヌの見解に果して耐えられるかどうかである。

と云うのは、若し星野氏の見解が正しいとすれば、我々はバクーニンの熱望を満足し得る状態に即ち、革命は可能だという見解を抱き得るし、シモーヌの批判が正しければ、バクーニンの憂鬱を背負い込むことになるからである。

従って、我々は与えられたる条件、又はその条件の批判から戦術を決定すべきであって、労働者一般が革命的な、歴史的な使命を持っている筈だ、と云う必然論的な客観的見解から、

それをなすべきではない。

(7)

少し問題を外れ、又は深入りし過ぎたきらいもあるので、この如は、若い潑刺たるアナキスト諸君にゆだねて、本論文の主題だった日本の労働者と家族の問題にかえろう。

日本の労力事情の複雑性のために、最初に膨大な未組織労働者諸君の問題点を浦えなければならぬ。そして、この問題の解決なくして、革命を語るなど全く不可能だと我々は考えているが、幸いにも「クロハタ」は特集号で、それぞれのエキスパートによって、解放へのそれぞれの方向を追求する努力を示してくれているので、我々は直接、日本の組織労働者の問題へ入ることにしよう。

尤も、ここでは前述の労働と知識の分裂の廃棄という問題から離れて、第二義的な労働者の所得の問題のみから、話を進めなければならないのは、日本の特殊労働形態のために、又、止むを得ないことである。

誰でも知っている通り、日本の企業資本家と労働者の関係は一貫して、温情主義的家族制度とそれに依存する低賃銀と長期勤続制度に基礎をおいている。勿論、労働者は極度の低賃銀のためにストをやるが、それを通じて我々が希望している階級的自覚を彼らが獲得することとは極めてまれだ。その理由は色々ある。その最も大きな原因の第一のものは、その労働者の所属する企業組合が、ストをやってクビになった労働者には、なんの関心も示さないことである。又、オープン・ショップはあっても名目だけで、その企業に働いている臨時工にすら適用されていない有様だ。殊に最重要視されなければならぬのは、労働者の厚生設備、医療及び娯楽などの設備が、組合の力ではなく、企業資本家の温情主義的出資によって行われていることである。

アメリカでも西欧でも、これらの機関は全部一職能別、又は産業別合同労組の最も重点を置く中心的な社事であり、それらの中には、組合加入労働者がかもし死んだ場合には、その家族の世話まで見る組織さえ持っているものもある。又、古臭い日本的な長期勤続制など、てんから問題外のことなので、日本のように如何に腕のある若い労働者も、十年一十五年と勤続しているだけで腕も何もない労働者の賃銀に及びもつかないと云う不合理は行われていない。賃銀がその腕の熟練によって決められないで、旦那に何年忠勤したかという忠誠の年期によって決定されるありがたい習慣は、日本の企業資本家によって、その子飼いの労働者が結婚すれば結婚手当を、子供が出来れば扶養手当を（たとえ目葉ほどの少額であっても）、三十年、四十年と勤め上げれば、お店を分けてやるという意味で、かなりまとまった退職金を出させている。

このように日本に固有な事情が、日本の労働者とその家族を深く包んでいるとすれば、彼らが腹の底から組合運動に関心を示し得ないのも無理からぬ話である。そして、お先き走りのオッチョコチョイな奴が、組合を足場にして代議士にでもの上ろうとするのも、又、止むを得ない話である。

処が、今や、この日本に固有な企業資本家の家族的温情主義が廃棄されねばならない事情が起つて来たように見える。その第一は歴史的なものである。即ち、第一産業革命時代において、手工業と親方制度が、蒸気機械の出現のためにくずれ、近代雇傭制度が確立されたように、最近代における第三の産業革命期において、各企業は、高性能の機械とオートメーション化のために、役付き職制（これが温情主義の重なる防壁であった）の支配を不必要とするに至つたことである。同時に、これらの設備改革や導入のために要する資金の固定の膨大さのために、温情主義を温存する余地が企業資本家達になくなることである。この例として、各工場に、その工場の立地条件の変更の問題が漸く日本にも起つて来た。それは工業用の汚水を河川に流すことから、附近の住民との間に起きるトラブルとは別に、近代の重要産業はその製品の生産過程において、製品一トン当りに何百、何千トンという水を必要とすることに關連する。水道ではやり切れないので、各企業は地下水を汲み上げているが、そのために地盤の沈下が日本の各重要工業地域に起りつつある。そのためにその工場は移転をよぎなくされるばかりでなく、その企業工場周辺の住民の損害をカバーしなければならぬ。かよう

な失費は資本家どもが計算に入れていないことであつたが、今や彼らの肩にのしかかつて来たのである。

第二は、フルンチョフの十七年後には共産主義社会に移行して見せる一という豪語の反作用である。日本の企業資本家も御多聞にもれず、より高度な機械化に拍車がかけはじめられるであろう。そのため資本の固定は膨大なものとならう。

かくて日本の企業に固有なものであつた家族主義的温情主義が崩壊して行く過程において、はじめて日本の一般労働者とその家族も、自分らを雇っている資本家どもの正体を見抜き、彼らがとりもなおさず自分等労働者を生殺しにする国家の手代に過ぎないことをさとるであろう。自分らの組合はどうならねばならないか、総評はどう変質しなければならぬかを、考えはじめたであろう。彼らは勿論、総評は政党支持第一主義を改めねばならぬと考えるだろう。個人加入をみとめ、合同組合組織に切り換える必要を強調するであろう。そうして何よりも重要なことは、総評がその組織の力を以って厚生設備、医療、娯楽などの諸設備を、資本家から奪い取り、総評それ自体の手で再組織することに重点をおく必要を痛感するであろう。この段階へ日本の労働者一般の自覚が達した時、彼らははじめて大沢君のスローガンを心の底から呑む必要を感ずるのであらう。

註記

一九五八年十一月発行「ひろば」に掲載された大沢正道の論文「原水爆死か社会革命か」は、その年の八月にひらかれた日本原水協の第四回原水爆禁止世界大会における平和共存路線の主張とその右翼日和見主義を鋭く批判したものであった。

それをうけて、小川のこの本稿は大沢論文が言及していない部分をさらにふえんし、かつ日本の労働者と家族の問題に照明をあてることによって「アナキストが主張する社会革命とは何か」を示唆しようとしたものである。

（以下は非常に薄い文字で印刷された、ほとんど読めない注記が続く）